

過疎山村に住む高齢女性のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポート ——1997-98年の岡山県高梁市の追跡調査——

安田女子大学 野邊政雄

1 目的

報告者は、岡山県高梁市で1997-98年に高齢女性を対象として調査を実施した。その後の2017年に同市の過疎山村にあるU町とM町で同じ質問を用いた調査を実施した。この報告の目的は、両調査のデータを比較することによって、過疎山村に住む高齢女性のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートがどのように変化したかを考察することである。

2 方法

1997-98年の調査では、住民基本台帳にある65歳以上80歳未満の女性から、22%の女性を無作為抽出し、調査票を用いた調査員による個別面接調査を実施した。有効票数は523票であったが、U町とM町に居住する高齢女性の83票を分析する。2017年の調査では、住民基本台帳にもとづいて、U町とM町に居住する65歳以上80歳未満の女性を悉皆調査した。調査方法は前回の調査と同じである。有効票数は139票である。

個人のパーソナル・ネットワークを測定するため、①回答者が入院した場合の本人の世話、②2～3万円の借金、③仕事上の話や相談、④心配事の世話、⑤失望や落胆をしているときの慰め、⑥留守のときの家の世話、⑦些細な物やサービスの入手、⑧交遊、といった8つの日常生活の状況で、サポートを仰いだり、交遊したりする相手の名前を何人でもあげてもらった。①から⑦までの質問はサポートを入手しうる相手を尋ねたが、⑧の質問は実際に交遊する相手を尋ねた。①から⑤までの質問では同居する家族構成員を含めて相手の名前をあげてもらい、⑥から⑧までの質問では、同居する家族構成員を除いて相手の名前をあげてもらった。③の質問は就業している回答者にのみ尋ねた。回答者が8つの質問で同一の人を何回もあげることがあるが、そうした相手は1人と数える。回答者がこれら8つの質問のいずれかであげた相手の人数をパーソナル・ネットワークの規模とした。あげられた相手それぞれについて、詳細を回答者に更に尋ねた。そして、あげられた相手を社会関係の間柄によって、①同居家族、②（別居する子供を含む、家族外の）親族、③職場仲間（上司や同僚）、④近隣者、⑤友人、の5つに分けた。また、あげられた相手を居住場所によって、①歩いて15分以内の地域（「近隣地域」）、②（近隣地域を除外した）高梁市内、③（近隣地域と高梁市内を除外した）岡山県内、④岡山県外、の4つに分けた。

3 結果

分析の結果、次の5点を明らかにした。(1)同居家族関係数、親族関係数、近隣関係数、職場仲間関係数は、1997-98年と2017年の間で大きな差異がなかった。(2)1997-98年よりも2017年のほうが、友人関係数は多くなっていた。なかでも、高齢女性が高梁市内で取り結ぶ友人関係が多くなっていた。(3)その結果、高齢女性のパーソナル・ネットワークの規模は、1997-98年よりも2017年のほうが大きくなっていた。(4)1997-98年よりも2017年において、友人は情緒的サポートの入手や交遊でより重要な役割を果たすようになっていた。(5)2017年の調査では、多くの高齢女性が自動車やバイクを運転するようになっていた。そのため、高齢女性はより多くの友人関係を保有するようになったと考えられる。

4 結論

以上から、過去20年間に、過疎山村に住む高齢女性は友人関係をより多く取り結ぶようになり、サポート入手においても友人がより重要な役割を果たすようになったことが判明した。